

大友義統の古文書

三 木 俊 秋

大友義統は大友宗麟の子で、大友松野系図によれば、永祿元年に生れたとあるので、宗麟の二十九才の時の子である。父宗麟の譲を受けて相続したが、天正七年正月十一日である。宗麟は天正十五年に死ぬまで、義統の後見として活躍している。こゝに集めた古文書は大分県史料刊行会に於いて今までに調査した範囲内で、県下に現存する古文書中大友義統の花押のある文書のみを、花押の類型に従つて分類したものである。田北学氏の「大友史料」からは収録しなかつた。又明らかにその年代の文書と思われるものでも、花押型判然とせぬものは省いた。

1. この頃は父宗麟が肥前龍造寺隆信、薩摩島津義久と九州を三分した形勢となり、宗麟は豊筑肥日七州を管して、大友氏の最も隆盛を極めた時代である。この花押を使用したのは、今の所元亀四年二月二十一日の田村文書が上限であり、天正元年に定される十二月二日の肥後国、田北文書が下限である。県下の残存文書は次の一通である。

文書名	郡名	年月日	内容	概略	宛名
古後次作	玖珠	8. 1.	八朔之儀として三種送られ祝着臼杵越中守礼を申す		古後六右衛門尉

2. この花押様式は、五月一日の肥後国藤崎文書で天正二年に比定されるので、この頃使用されたと思われる。県下の残存文書は次の三通である。

長野末夫	速見	2. 18.	父三河守鑑言の跡目相続の旨に任せ領掌すべし		長野藤次郎
長野康雄	〃	7. 16.	一字之事統辰遣す		なし
古後次作	玖珠	8. 1.	八朔之儀三種送られ悦喜す、浦上左京入道礼を申		古後兵右衛門尉



3. この花押は正月廿日の石見因牧文書が、天正三年に比定されるので、この頃使用されたと思われる。県下では次の四通が判明している。

長野末夫	連見	3.	15.	因幡守所望の由承知す	長野右京亮
長野康雄	〃	10.	3.	一字之事統利遣す	長野八郎
津崎	東国東	3.	16.	四郎右衛門尉望申す由存知す	津崎將監允
竹田津文人	〃	2.	26.	前二十一日熊毛浦に至賊戰懸合討果す辛勞感じ入る白杵越中守より申	竹田津源助



4. この花押の形は、父宗麟が永祿七年頃から元龜三年頃まで使用した花押と同じであるが、義統が使用したのは、今の所天正三年に比定される八月一日の田村文書を上限とし、天正七年に比定される三月廿七日の大友史料第二輯の文書を下限とする。

この頃には天正五年頃から、日向高城城主土持親成が大友氏に背き、島津義弘に内通していたので、天正六年三月大友宗麟自ら兵を率いて日向に進んだ。島津氏も亦兵を出して土持を援けた。大友方遂に松尾城を陥入れて土持親成を捕え帰り、国東の浦部にてこれを殺した。

又、島津義久は土持の変を聞いて、同年九月島津彰久らをして日向に向わしめ、長倉勘解由の石城を攻略した。十月宗麟七ヶ国の兵十万を率いて日向に出陣、日向耳川に至り先陣島津家久と戦った。十二日大敗して十四日豊後白杵に退いた。この敗北が大友氏をして、衰亡の一途をたどる転機となつたのである。従つてこの戦に関係した文書であると断定出来るものは次の通りである。

天満淵神社	大分	(天正6)	3. 19.	進発につき太刀一馬一疋寄進武運長久を祈る	大宮司
松野	〃	(〃)	3. 9.	進発につき立願のため太刀一、馬一疋寄進武運長久を祈る	賀来社大宮司
一万田	〃	(〃)	4. 15.	土持要害落去の時自身分捕高名紛骨感悦	一万田次介
波津久	大野	(〃)	4. 15.	土持要害落去の刻自身分捕高名紛骨感悦	波津久 右近允
佐土原	〃	(〃)	4. 15.	〃	佐土原 兵部丞
豊田	速見	(〃)	3. 30.	日州高城表にて雄城弥十郎同前父左馬戦死忠儀比類なし追て賀す	長田 万千代
古屋	速見	(〃)	3. 30.	日州高城にて雄城弥十郎同前父卯正忠誠死忠儀比類なし追て賀す	小野尾三郎二郎
長野 康雄	〃	(〃)	4. 22.	日州高城表にて父右京亮旧北相摸守同前戦死忠儀比類なし追賀	長野 孫市郎
薬師寺	北海道	(〃)	5. 3.	日州行につき兵船を申すに俄の馳走殊に日知屋長々在城辛勞感悦取鎮後必追て賀すべし	薬師寺 兵庫助
徳丸	大分	(〃)	5. 3.	日州行につき杯新九郎同陣辛勞感じ入る初秋時分出勢馳走肝要	徳丸 主馬允
志手	速見	(〃)	5. 4.	日知屋城に雄城弥十郎と差籠り同心を以馳走悦喜す河内守に任す	志手 中務丞
佐藤 春夫	大野	(〃)	5. 4.	土持表思案中使僧に預り感悦諸軍打入の覚悟と満月寺申志賀安房入道云つて話す	三田井
古屋	速見	(〃)	5. 7.	最前より在陣感じ入る、雄城弥十郎玉葬表登城申付く辛勞乍ら同陣專一	小野尾 輝正
長野 康雄	〃	(〃)	5. 10.	日州表にて田原近江入道同陣辛勞感入	長野 式部少輔
長野 末夫	〃	(〃)	12. 12.	日州高城表にて父式部亟戦死忠儀比類なし追て賀すべし	長野 宮乙
中村	大分	(〃)	12. 13.	日州高城表にて吉岡越中入道同前父兵部少輔戦死鑑貞跡目相統之旨に任せ領掌すべし	中村 新三郎

宗麟が耳川の合戦に敗退後は、大友に所属していた豊筑肥の諸勢秋月、筑紫、星野、問注所、草野、蒲池、西牟田、龍造寺、平戸、宇土、大村等何れも離反して叛く様になるのであるが、次の文書では肥前龍造寺隆信の活躍のために、秋月豊筑の土豪

の動搖を示しており、天正七年のものである。

この花押を使用したのは、今まで判つた範囲では、天正三年八月より天正七年三月であるが、この間の何れの年の文書であるか不明のものは、次の通りである。

羽野	連	日田	(天正7)	3, 22.	秋月并豊筑之者共悪逆之企あり、毛利兵部少輔同城軍勞感入弥馳走簡要	羽野	勘七郎
久保		大野		2, 11.	治部少輔望之由免許す	久保	少輔次郎
小野	信夫	大分		2, 26.	佐渡守望之由存知す	小野	兵部丞
長野	康雄	速見		9, 13.	式部少輔所望之由許遣す	長野	七郎
岐部	逸翁	玖珠		3, 29.	名字之事別紙の如く認遣す	岐部	紀太郎
古後	次作			8, 1.	八朔之祝儀として兩種送給悦喜す朽網三河守礼を申	古後	兵右衛門尉
柞原	八幡社	大分		11, 6.	由原造宮過半調う、木屋夫一兩日中に調うべし未断の者の交名を出せ	志賀	安房入道
日野				6, 12.	府内屋敷祇園神領其方格護せよ、町人居屋敷料を以て召移せ社頭上	税所	越中守
久保		大野		2, 11.	父中務少輔跡目相続領章相違あるべからず	久保	治部少輔
長谷部		日田		5, 21.	一字之事統広遣す	津江	兵部丞
薬師寺		北海道		11, 17.	二字之事統直遣す	薬師寺	兵庫助
大畠				1, 20.	当城誘之儀辛勞感入岩屋与兵衛入道より申す	大畠	織部助
大畠		西国東		3, 14.	父兵庫助統直跡目相続之旨に任せ領事すべし	薬師寺	鶴龜



し、宗麟は野上一閑、坂本道列を派したが、大友方敗れて豊後に帰つた。この花押を用いた文書はこの時のものが多い。

5. この花押を用いた年代は、今まで判つた範囲では、天正七年五月廿八日の筑後国注所文書を上限とし、天正七年と比定しうる十二月八日の長野末夫文書を下限とする。この年九月六日龍造寺に属した秋月種実は大友氏麾下の太宰府宝満城を攻めんとし、戸次道雪高橋紹雪と戦つた。龍造寺隆信は援軍として執行越前守を遣わ

小田原	直	12.	9.	当時加判人数なく辛劣乍ら申談じ前々の如く取沙法肝要	田原	常陸入道
岐部	東国東	2.	16.	隼人佐所望之由存知す	岐部	弥五郎
入江	速見	3.	15.	一儀腹藏なく御入魂祝着 宗謙より申	田原	常陸入道
〃	〃	2.	23.	鞆懸要害之儀承知す指南に任せ城番堅固申付く使節を以申す	田原	常陸入道

首藤	大野	(天正7)	6. 3.	内記允所望之由存知す	首藤	六郎
横山	別府	(〃)	6. 18.	父大炊助已来近辺衆近年在陣打続き馳走承知前々の如く節を遂げる 事肝要	渡辺	民部少輔
〃	〃	(〃)	8. 16.	度々出陣秋月城屏下にて庇つく紛骨感悦馳走肝要 吉弘左近大夫より申	戸次	中務少輔
詫摩	北海道	(〃)	8. 24.	名字統正認識	詫摩	太郎
石松	日田	(〃)	8. 26.	前十七日大肥庄にて秋月に行砕手庇つく忠儀感入弥紛骨肝要	石松	左近亮
羽野	連	(〃)	8. 26.	〃	羽野	源七
久保	大野	(〃)	9. 16.	久保中務少輔について申談す宗歴宗傑一通被見同意を以馳走専一	戸次	左近大夫
甲斐熊彦	直入	(〃)	9. 24.	朽網三河入道在陣馳走感入	甲斐	備後守
長野末夫	速見	(〃)	12. 8.	木付紀伊入道同陣長々在陣殊寒天時分感入宗虎より申	長野	宮内丞
吉弘	速見	(〃)	12. 8.	木付紀伊入道同陣長々在陣殊寒天時分感入宗虎より申	吉弘	大炊助

宇野

速見 (天正7) 12. 8.

長々在陣殊寒天時分苦勞之段感悅木付紀伊入道より聞く馳走悦喜す

宇野 宮内丞



6. この花押の型は前の型に似ているが、右肩の点がとれている。この花押を使用したのは、今まで判明した範囲では、天正八年正月十六日の成恒文書を上限とし、天正九年正月十六日の田原滝藏文書を下限とする。この天正八年正月には、宗麟に従つて日向耳川の戦に第三陣の將として向つた田原親貫が、肥前龍造寺と通じ国東郡鞍懸城に拠つて大友氏に叛いた。宗麟は義統を総大将としてこれを攻め閏三月、田原親貫鞍懸城に戦死した。義統は弟新九郎親家をして田原家を継がせた。従つてこの花押を使用した残存の文書も、この戦に関するものが多い。

又、直入郡岡城主田北紹鉄も、耳川の合戦に第一陣の將として出陣した、これも田原親貫と同心し、時を同じくして烽起し岡城を出て熊群山に立籠つた。親貫戦死の報を得て筑前に逃れんとし四月十三日、日田郡五馬庄竹首にて戦死した。

長野末夫	速見	(天正8) 2. 16.	田原左馬頭逆心により其方の心底志賀安房入道朽網三河入道より聞感じ入る道種、宗歴と入魂の由逆貫を討て	長野 因幡守
萱嶋	東国東	(〃) 3. 1.	親貫逆心之企に家中一致忠儀之心懸感じ入る親家在郷之上は馳走肝要なり柴治右衛門より申	萱嶋 美濃守
植田	(〃)	(〃) 3. 23.	其表乱総之刻田原近江入道妙見岳在城籠城軍勞感じ入る馳走肝要	植田 因幡守
竹田津文人	(〃)	(〃) 3. 27.	一字之事統直遺す	竹田津 七郎
田原 達三郎	西国東	(〃) 壬. 3. 13.	帯刀安芸入道去年高田要に在城初春以來壁山岳登城統運出談	田原 新九郎
津崎	東国東	(〃) 壬. 3. 26.	親家登城已来深重馳走悦入一雅意の悪党討果し親家に軍忠励むべし	津崎 大和入道
丹生	(〃)	(〃) 壬. 3. 26.	日州高城表にて父左京亮齊藤進士兵衛尉戦死跡目相統之旨に任せ領掌すべし	丹生 新十郎
久保	大野	(〃) 壬. 3. 28.	統方庄内35貫諸点役を免許す	戸次 頭書頭
小出	東国東	(〃) 壬. 3. 28.	其表乱総之刻統運馳走感悦統運に至り貞心抽べし、追て賀す	竹田津軍人入道
長野末夫	速見	(〃) 4. 10.	田原左馬頭逆心につき鞍懸近方夜白軍勞感じ入る	長野 因幡守

工藤隆弘	速見	(〃)	12. 13.	越後守所望之由承知す	辻間 弾正忠
津崎	東国東	(〃)	12. 2.	親家に馳走家中紛骨感じ入る弥一致貞心肝要なり栗田志摩入道より申	津崎 大和入道
横山	別府	(〃)	11. 1.	一字之事統秋遺す	渡辺 掃部助
市丸	東国東	(〃)	11. 1.	最前より在城軍勞感じ入る、紹忍指南により馳走肝要小田左京死より申	市丸 長門入道
一万田	大分	(〃)	11. 1.	市之進所望の由免許す	一万田 左吉允
城内	速見	(〃)	10. 3.	若林越後守類船を以紛骨承知時分を以賀す鎮与より申す	辻間 弾正忠
〃	〃	(〃)	9. 22.	名比類なし鎮述より礼申す	〃
字野	速見	(〃)	9. 22.	勞肝要なり鎮述より申す	字野 宮内丞
〃	〃	(〃)	8. 3.	前十四日安岐郷切寄一戦の刻庇つく追賀	一万田 左吉入道
一万田	大分	(〃)	7. 18.	前十一日安岐切寄防戦の刻庇つく、追賀	一万田 左吉入道
朝見八幡社	別府	(〃)	7. 11.	祈禱のため定悪院差上す弥懇祈抽すべし段子一反進む	伊勢御塩焼太夫
佐土原	大野	(〃)	6. 21.	許す、先年日州高城矢入之刻父兵部少輔戦死必時分を以賀す先づ当知行免許す	佐土原 伝助
安東	西国東	(〃)	5. 4.	肝要なり統秀より申	安東 宮内記
石松	日田	(〃)	4. 26.	其表乱総之刻波多藤次兵衛尉指南に馳走堀木、丸山一類心がけ専一	安東 外記
古屋	〃	(〃)	4. 10.	田原右馬助逆心につき累さくらん鞍懸近方夜日軍勞感入	小野尾二郎三郎
豊田	〃	(〃)	4. 10.	〃	長田 鶴若
児玉	〃	(〃)	4. 10.	〃	松ヶ尾 新次郎
長野 康雄	速見	(天正8)	4. 10.	田原右馬頭逆心につき鞍懸近方夜日軍勞感じ入る	長野 中務入道

城內	速見	(天正8)	12. 13.	一字之系統為遺す	辻間 越後守
宇野	速見	(〃)	12. 13.	一字之系統為遺す	辻間 越後守
田原 滝造	西園京	(天正9)	1. 16.	田原近江入道忠謀入魂に預り感悦なり、加勢之儀急度相備忠貞專一肝要なり田原九郎より申	田原 七郎
田原 滝造	西園京	(天正9)	1. 16.	所々軍勢承知す、山香郷領地内万難諸点役免許す檢断不入なり前々之如く跡願定肝要なり	宇野 宮内少輔



7. この花押型は、中心の柱の下部に黒点を生じている所が、前型と異っている。この型式を用いたのは、今の所天正九年十月の石松文書を上限とし、天正十年四月十日の大分社文書を下限とする。この頃島津氏は盛んに肥後に進入、龍造寺は筑後に侵入した。大友宗麟は志賀、一万田をして肥後を征せしめ吉弘、白杵氏を派し、筑後を征せしめた。又十月には、豊前彦山の衆徒を攻め焼打を行った。十一月には大友軍筑後生葉に打ち出で、立花消雪と共に秋月勢と戦った。又十二月には、宇佐八幡社家衆が宗麟の命に従わなくなっている。この花押を用いた文書は次の通りである。

宗麟が子弟二人を選び、使節として老臣二人を顧問として従わせ、ローマへ派遣したのは、天正十年二月頃である。

石松	日田	天正9年10月	彦山表玉屋口一戦之刻石松兵部少輔嶺昌親類被官碎手或は分捕高名を立つその類、手負人注文	足田 隼人	
足田	北海道	(天正9)	11. 20.	高山軍人等に登城申付く	
石松	日田	(〃)	11. 28.	前十七日生葉郡助之刻勸骨其方後従庇つく軍勢感入	
長野 康雄	速見	(〃)	12. 3.	宇佐社中一雅意企つ田原近江入道閉目す妙見岳留守番辛勞を質す	長野 弥十郎
上津 八幡	大野	(〃)	12. 13.	玉彦表在陣軍勢を算す	大野 大宮司
古後 次作	玖珠	(〃)	12. 20.	彦表にて森左馬助同心在陣寒中辛勞感じ入る	古後兵右衛門尉

長谷部	日田	(天正9)	12.	26	一字之事統秀遺す	津江 孫三郎
橋本	"	(//)	12.	27.	前廿四日生葉表にて嫡子新三郎分捕高名追て賀す	神主宮大夫
松野	大分	(天正10)	1.	22.	条々。万寿寺築地・町屋敷・百姓成敗・町役地下人・公役等	柴田 筑前入道
佐土原	大野	(//)	1.	22.	近年所々在陣辛勞感じ入る、野津院内佐土原11貫5百分について万雑諸点役検断不入を免許す	佐土原 伝允
城内	速見	(//)	2.	28.	一字之事統直遺す	辻間 弾正忠
一万田	大分	(//)	2.	29.	字目村中15貫分諸点役免許す検断不入なり	一万田 市之進
長野末夫	速見	卒末詳	4.	26.	父派内允統秀跡目相続之旨に任せ領掌	長野 宮徳
古後次作	玖珠	//	8.	1.	南呂之儀として三種送られ悦喜す浦上長門礼を申	古後兵右衛門尉
薬師寺	北海道	//	8.	1.	八朔之儀として三種送られ悦喜す、吉良越申入道礼を申す	薬師寺 兵庫助
長野末夫	速見	//	8.	25.	田原近江入道同心軍勞感じ入る、紹忍より申す	長野 弥十郎
波津久	大野	//	9.	5.	父主殿助安見松にて戦死辛勞感じ入る、國中一所与ふべし先づ当知行中13貫5百分雑諸点役免許す	波津久 右近允
柞原	大分	//	9.	12.	豊前龍王内7町野津院三貫分所持別儀なし	宮師 御房



8. この花押は、中心の柱が両側の斜線より短かくなり、玉は大きくなつて、中の方へ釣り上つてゐるのが特徴で、天正十一年に比定される正月廿八日の豊前国佐田文書を上限とし、天正十二年に比定される七月廿六日の児玉文書を下限とする。この頃天正十一年正月頃は、筑後に於いて島津に従つた田尻鑑種を龍造寺の軍が攻めた。島津義弘田尻氏を援けん為め高尾城に入る。大友氏は龍造寺を援けんとして、堀切城に拠つて義弘の軍と戦つたが、敗れて高良山に退いた。三月下旬になつて、大友と島津は和睦した。

翌十二年三月には宗麟は義統と謀り、豊臣秀吉の援けによつて島津氏を征せんとして三月下旬宗麟は大坂に上り秀吉に謁見

し虎皮百枚を献じて援を乞うている。又この年秋には、筑後猫尾の城主黒木実久は、龍造寺について大友に叛いた。七月上旬宗麟の軍大挙して生葉郡に打出で立花退雲、高橋紹雲の軍と合して柳川、西牟田、他諸城を落した。豊後筑前の大友勢は高良山と柳坂北野村で越年している。

文書もこの戦に関係したものが多し。又天正十年か十一年の十月には、主力を豊前鎮庄に向けている。この花押型式を用いた文書は次の通りである。

田北 宣明	直入	(天正11) 壬1. 9.	当春出勢の儀について堺目内略調油断なく出陣の文段專一	城後 三河守
児玉	遠見	(天正12) 7. 26.	本庄伊賀守同陣浦井日正本長庄頭要害猫尾城打崩骨感し入る	松ヶ尾 源 正
豊田	〃	(天正12) 7. 27.	本庄伊賀守同陣浦井日正本長庄頭要害猫尾城打崩骨感し入る	長 田 主 殿
志賀 政親	直入 (〃)	10. 3.	筑後にて志賀兵加勢同心在陣軍勞感し入る、伊豆守所望の由承知す	志賀 中務小輔

次の文書は天正十一年か十年かに豊前へ発向した際の文書と思はれる

一万田	大分	10. 10. 11.	去月24日下毛郡間田切寄打崩に分捕高名、前に宇佐郡佐野切寄に庇つく忠儀感入る	一万田 市 進
豊田	速見	10. 28.	豊前国発向之刻在陣下毛郡佐野切寄で庇つく又小者一人庇つく忠儀感し入る	長 田 主殿助
〃	〃	10. 28.	豊前国発向之刻在陣下毛郡佐野切寄で庇庇つく忠儀感し入る	小野尾河内入道
田原 滝造	西園東	12. 20.	豊前表佐野切寄打崩之刻分捕高名忠儀感し入る	田 原 左近丞
長野 末夫	速見	1. 16.	安心院表にて本庄中務少輔同陣軍勞感入る	長野 源内 允

次の文書はこの花押使用期間の天正十、十一、十二の三ヶ年中何年に比定されるかまだ判明しない。

長野 末夫	速見	1. 23.	龍ヶ鼻三ヶ年在城辛勞感悦なり、田北十郎より申	長野 因幡守
一万田	大分	2. 9.	一字之事統綱遺す	一万田 与九郎

柞原	大分	2.	28.	臨時之祭礼、祝着	賀来社大宮司
一万田	大分	3.	6.	宮内少輔望の由承知	一万田 市進
小忠	東國東	3.	27.	一字之事統宣遺す	竹田津 伝 允
長野末夫	速見	4.	3.	龍ヶ島城番部甲山城入道申付勤番要田北十郎より申	長野 勘七郎
松野	大分	4.	6.	当社造宮油断なくすべし、当社材木由布院六ヶ所にて採用專一	大 宮 司
和厚	大分	10.	17.	左近將監所望之由存知す	なし
久保	大野	11.	14.	其大無足辛勞を賞す	戸次 図書允
石松	日田	11.	17.	其方通俗し財津大寺元に向り在陣同心辛勞平右衛門尉統貞に補任す	財津 得 能



9. 義統がこの形式の花押を用いた文書は、非常に少く、上段としては天正十三年に比定される十月六日の筑前の国蒲池地文書であり、天正十四年正月十九日の波津久文書を下限とする。

島原有馬氏は攻めたが、有馬氏は援けを島津に求め、島津軍北上して龍造寺を攻め、龍造寺隆信敗れて戦死した。これによつて肥前筑後は殆んど島津氏の支配下に入つてゐる。

日田	豊後部	4.	3.	新念申付く、和泉守其意を得べし	正田 神九郎
津	久太馬	天正14年1.	19.	一字レ行羅廣之を遺す	波津久 弥三郎

10. 然しこの花押使用期間のうち、天正十三年四月頃より同年九月廿五日頃までは、負傷のためにこの朱印を用いている。集まつた範囲では八月廿一日の徳丸文書を上限をし、九月十何日の渡辺澄夫文書を下限とする。この朱印の文書は次の通りである。



一万田	大分	(天正13) 千9.10.	近年所々軍勞感悅筑後國上妻郡内十町等預置く	一万田宮内少輔
徳丸	"	(") 千8.21.	越中守望之由存知す	徳丸 新介
城内	速見	(") 9.2.	柴田左馬助同陣把木表動之刻即從市弥太市右衛門弥四郎斬死感し入る	辻間 弾正忠
児玉	"	(") 9.10.	本庄伊賀守同陣軍勞感し入る鎮述の事津久見に至り差遣す	松ケ尾 新二郎
古屋	"	(") 9.10.	"	小野尾 新介
豊田	"	(") 9.10.	"	長田 新次郎
渡辺 源夫	北海道	(") 9.1?	一字之事統利遣す	小原 新四郎



11. この型の花押は天正十四年に比定される一月廿四日の日野文書を上限とし、大友史料第二集に採録せる天正十五年十二月十三日の文書を下限とするが、義統が秀吉より一字を貰つて吉統と改名したのが天正十六年四月下旬なので、この改名前まで使用したと思われる。この頃は島津の勢力強大となり、筑後、肥前を従えた勢いに乘り、大友の所領まで侵入せんとする気配が見えたので、義統は天正十四年正月、秀吉に援けを得るため上洛しているが、この時出発に際して大分祇園社、佐賀関速吸社等に在京中の國中無事を祈願せしめている。然し島津は遂に豊後に侵入して、この年大友氏の全所領に亘つて大友軍を蹂躪するのである。秀吉は大友宗麟の乞いによつて毛利、吉川、小早川を豊前に仙石・長曾我部を豊後に遣わすが、天正十五年三月自ら大兵を率いて小倉に至り更に四月には隈本城に入つた。五月八日に至り遂に島津は秀吉の軍門に降つている。従つて文書もこの花押の文書は、薩摩の悪党に關するものが多い。宗麟はこの間天正十五年五月廿三日に臼杵城で死んでいる。

日野	大分	(天正14) 1.24.	不図上洛す在京中祇園松坂に於て無事を祈れ	税所 中務少輔
速吸 社	北海道	(") 1.26.	急度上洛海上及在京中異儀なき様関宮前懇祈励むべし	関宮 神主

平林	大分 (天正14) 1.	28.	薩摩悪党國中へ乱入の時吉備引三郎に同心して再生嶺籠城用心方譜請感入る	平林 兵部丞
石松	日田 (〃) 1.	28.	薩摩悪党國中へ現形庄内乱入之処籠城用心普請已下無縁感入る休庵下知に馳走肝要なり	財津平右衛門尉
薬師寺	北海道 (〃) 1.	28.	薩摩悪党國中へ現形之刻津久見要害別して辛勞感入る不慮の成立にて丹生籠城忠貞神妙なり	薬師寺兵隊助
工藤隆弘	近見 (〃) 2.	10.	薩摩悪党辻間村現形之刻分捕高名渡辺主計允小者二人庇つく粉骨感入る	辻間 越後守
坂内	〃 (〃) 2.	10.	薩摩悪党辻間村現形之刻分捕高名渡辺主計允小者二人庇つく粉骨感入る	辻間 越後守
古後次作	玖珠 (〃) 2.	16.	薩摩悪党現形之刻少々にて在陣順路の覚悟にて宇礼籠城軍勞感入る	古後 刑部丞
古後次作	〃 (〃) 2.	16.	薩摩悪党現形之刻少々にて在陣順路の覚悟にて宇礼籠城軍勞感入る	古後 勘三郎
久保	大野 (〃) 8.	24.	薩摩悪党現形之刻由布城に至在城軍勞感入る	久保治部少輔
津生	大分 (〃) 9.	19.	薩摩悪党現形之刻戸次庄利先表に父彈正忠職死忠憤感入る跡目相取の旨に在陣相違ふべし	徳丸 幸市
渡辺	北郡 (〃) 9.	19.	薩摩悪党現形之刻戸次庄利先表にて相父河内入道戦死、先年日州高城表父彈正忠職勞感入る跡目相取すべし	小田 新四郎
丸嘉土	近見 (〃) 12.	24.	薩摩悪党現形之刻分捕高名渡辺主計允小者二人庇つく粉骨感入る	帯刀 支内允
津久	〃 (〃) 12.	24.	薩摩悪党現形之刻分捕高名渡辺主計允小者二人庇つく粉骨感入る	堀 与次郎
津前	大野 (天正14) 11.	6.	其方官分捕出宗突に見せた。千石秀久長宗に申談し敵陣前討す覚悟たり、勇志氣概をなす	津久 右近允
津原	東国裏 天正15 2.	24.	其方官分捕出宗突に見せた。千石秀久長宗に申談し敵陣前討す覚悟たり、勇志氣概をなす	津崎四郎右衛門尉
津原八幡社	大分 〃 〃	13.	其方官分捕出宗突に見せた。千石秀久長宗に申談し敵陣前討す覚悟たり、勇志氣概をなす	平林 兵部丞
古後次作	〃 〃 〃	13.	其方官分捕出宗突に見せた。千石秀久長宗に申談し敵陣前討す覚悟たり、勇志氣概をなす	賀来 刑部丞
薬師寺	北海道 〃 〃	13.	其方官分捕出宗突に見せた。千石秀久長宗に申談し敵陣前討す覚悟たり、勇志氣概をなす	古後 刑部丞
	〃 〃 〃	13.	其方官分捕出宗突に見せた。千石秀久長宗に申談し敵陣前討す覚悟たり、勇志氣概をなす	薬師寺 兵隊助

次の文書はこの花押使用期間中何年に比定してよいかまだ判らない。

津崎	東国東	1.	2.	其陣立納下知を吉弘左近大夫・齊藤勘解由丸之申遣す馳走喜悅す、統幸統秀より申す	津崎大和入道 他八人
白杵	大野	1.	13.	去年以來山賊夜討聞あり野津院夜白油断なく浪籍人討果し妻子同罪にすべし	白杵 右京亮
薬師寺	北海道	8.	1.	八朔之儀として三種到来悦喜す齊藤紀伊入道より申	薬師寺兵庫入道
城内	速見	10.	27.	礼殿親子白杵に戦死す妻子当村滞在す面倒見よ筋目を立て子孫引立つべし	阿南 将監 阿南 越後守
工藤隆弘	"	10.	27.	礼殿親子白杵に戦死す妻子当村滞在す面倒見よ、筋目立て子孫引立つべし	阿南 越後守
城内	"	11.	5.	当村代官職天徳寺孫太郎に申付く諸百姓催促肝要なり末断の旗は交名を以一途申出よ堅固船辛勞乍ら早々相調べし	阿南 越後守
工藤隆弘	"	11.	30.	一字之事統満満す	辻間 新次郎



12. 義統は天正十六年四月下旬頃、吉統と改めた。この様式の花押は前の型とは、右側の垂直線の下方に、直角に交叉した点が入る所が異つてゐる。この型の花押の下限は今の所天正十八年に比定される十月十七日の平林文書を下限とする。この頃には島津征伐も終つて義統は秀吉から豊後一國を安堵され、部下の論功行賞も終つてゐるので、一応安定し、残存の文書も割合に少ない。吉統は天正十八年三月秀吉の小田原征伐に従軍してゐるので、この時の文書も含まれてゐる。はつきり年代を比定出来るのは少ない。

万寿寺	大分	3.	23.	泉福寺領百姓一雅意古作人でも救寺務肝要夫名を以て承一途申付く	玉英 西堂
速吸	北海道	5.	3.	塩法師異儀なく下向の託言、丹精祝着若林越後入道より申す	関宮 神主
速吸	北海道	6.	25.	当社惣檢校職次男龜寿に申付く。神役怠慢すな齊藤紀伊入道より申す	関 中務少輔
朝見八幡	別府	9.	2.	国家祈禱のため御核一合下給る製一折扇子送給ふ謁眼五百足進宮す	伊勢御塩焼太夫
長野末夫	速見	9.	21.	左馬助所望之由存知	長野 勘七郎

平林	大分	(天正18) 10, 17.	関東に到り参陣貫渥分銭辛勞の時銀子一包到来悦入親家より申す	平林 六郎丞
久保	大野	11, 15.	緒方庄給人中笹子を到来す、悦喜す	戸次 龜松

13. この形式の花押は、天正十九年頃に使用したと思われる。これを用いた文書は、次の通りである。

永富	大分	7, 23.	京所務申付く	豊饒 彈正忠
松野	天正19	5, 1.	擬 銀米・風呂・下行人、等	永富 兵右衛門 白杵右京亮 他二名
平林	北海部	6, 16.	在京音信として白布二端送られ遠路の懇志を謝す林九左衛門尉申す	平林甚右衛門尉
薬師寺	北海部	8, 1.	八朔三種送り給い祝着	薬師寺与市

14. この花押は前の形と類似しているが、中央下の点がなくなっている。この形式は文祿元年より文祿二年五月に剃髪して宗嚴と号し、中庵と改める迄使用したと思われる。文祿元年三月義統は、秀吉の朝鮮征伐に従軍して活躍したが平壤にて小西行長の軍敗れた時、義統は之を助けなかつたので、秀吉から領地を没収され、其身を毛利輝元に預けられた。この花押を使用した文書には、朝鮮征伐従軍の時のが多い。

平林	大分	(文祿1) 4, 9.	高麗園在陣分捕高名紛骨感悦帰国後賀すべし	平林 甚左衛門
堀	速見	(〃) 5, 22.	兵糧米運上、手火矢薬合等催促す	平林 神左衛門
田北一六	大分	(文祿2) 2, 3.	敏行之刻堀主勝尤、久介分捕高名感じ入る長々在城鎖勝紛骨感入堀朝之祝賀し申す	大神 兵部大輔
田北一六	大分	(文祿2) 2, 3.	名字認遣	田北 六郎

田北 一六	〃	(〃)	2.	16.	親父治部少輔辰跡相統之旨に任せ諸点役免許す	田北 六郎
平林	〃	(〃)	2.	22.	高田懸持之給人多分に高麗に召列のため領中百姓一雅意を持ち切錢以下納めす妻子をも引立調ふべし	平林兵部丞 他一名



この時の文書が一通残っている。あとは大部分が、義統が関東に下向していた頃のものである。

15. この形の花押は文祿二年五月に中庵、宗巖と改めて以後のもので、慶長十年七月十九日に死ぬまでこれを使用したと思われるが、現在判つていいる上限は、文祿三年頃の卯月十二日の筑後国吉弘文書、下限は慶長八年頃の二月廿日の竹田津文書となつていいる。この間慶長五年大友義統関ヶ原の戦に、豊臣方より依頼を受け、豊後を奪い返さんとして、九月別府に上陸し、黒田孝高と石垣原に戦い敗れていいる。この花押を用いた文書に、

曾根崎	宇大分	(慶長5年)	9.	14.	着郡につき書状に忠節を抽する由歡悦す、着到被見す、粉骨燙入る(差出名宗盛)	曾根崎阿内入道 田北三右衛門
田北 一六	〃	〃	10.	3.	昨日娘くれ路次如何かと案す娘機嫌よきや新兵衛夫婦辛勞之由なり心得らるべし	田北 喜介
〃	〃	〃	11.	20.	親父作左衛門去年以来関東下向別而辛勞其方一筋目紛なし	田北 六郎
一万田	〃	〃	4.	22.	宗像掃部助使として綾を送る	一万田 茂助
白杵	大野	〃	2.	17.	関東下向に白杵右京亮同心辛勞感入る右京亮妻子先廻上落之由下すべし	白杵 利右衛門
白杵	〃	〃	3.	2.	白杵右京亮同心を以関東を見届感じ入る、来秋下向肝要外聞成立せば願志す	白杵 理右衛門
若林	北海道	〃	2.	25.	関東下向基内御国まで見届頼母し下向以後到来なし	若林 基内允
〃	〃	〃	9.	5.	幸便に其表無事の由珍重清水水平内下りの時銀子到来祝着勸敷あつたので預入る、用所次才召寄すべし	若林 基内元
小串	東国東	〃	2.	20.	竹田津志摩入道参り、関東迄見届、一木妻子先廻上落親子辛勞なり向後失念あるべからず	相良与三右衛門

以上大友義統の花押のある古文書を、編年に整理して見たのであるが、この残存の古文書の内容の変遷は、そのまゝ大友宗麟の大友氏最隆盛期から、義統一代の間に、没落にまで転落する過程を如実に示すものであつて、戦国時代は下刻上と言われ

るが、かくも強大な勢力を誇つた名門大友氏の、急速な衰亡は、戦国末期の一つの顕著な、最後の犠牲と言わねばならぬ。然し大友氏の性格を深く掘り下げて見る時、かゝる運命をたどるべき脆弱性が内蔵されていたに相違ないのである。即ち家臣の機を見ては大友氏に反旗を繚さんとする気運、大友氏自身の内紛等今後の大友氏の性格の研究に期待する所が多いのである。かゝる意味に於いて大友氏研究にこゝに掲げたものがほんの僅かでも貢献する事が出来れば幸いである。(尙この研究は大分県史料編集委員である大分大学渡辺澄夫氏、同富米隆氏、県教育研究所員中野幡能氏等の協同研究により集めたデータにより成るものである。)

(大分県教育研究所々員)

敗軍の義統妾を得て忠臣を失ふ。

―かゝる危難のある中にも、愛恋熱情のわりなき道は神道の聖者の身にもあるならひ、義統妾人ありとて臼杵刑部少輔を召し、汝は是より立帰り何とぞして天野又兵衛が娘を召し具し来るべしと有りければ、臼杵則ち立帰り、やがて打連出けるが、敵早や府内に充滿して、通るべき様ならざりけるを、兎角切りぬけする程に、薄手二箇所蒙り、高崎城に着ければ、義統喜悅浅からず、帯たる太刀を賜ひてけり。臼杵は是を悦ばず、席を立て大音揚げ、此年ごろ数度の勲功ありし者某一人のみならず幾許も候ひしを、御加恩の沙汰もなく、用にも立ぬ女ばらを召具し来りし褒美なりとて引出物とは何事ぞ、其御心故かゝる恥

辱に逢ひ給へ、向後主君と頼み申すまじきと云捨て、行方知らず逐電しけるが、後には毛利輝元に仕へて芸州にありしとかや。

(豊薩軍記より立川)

由布登山した学者

一、竹田先生

唐橋世済と共に豊後国史の編修員の一人に命せられた田能村竹田は、早速寛政己未十一月廿三歳の四月より唐橋総裁以下一行四名と共に自国領内を巡廻探訪し、八月より、他藩領内の国志資料探訪の爲め巡廻、実地踏査を始めたが、九月十五日一応岡城に帰着、同廿九日再び出立、翌三十日府内藩領内に入り、大分郡の元南庄内富村に一泊、十月一日には湯平一泊、十月二日由布院徳野河原に一泊、三日に岳下に入つて仏山寺に投じている。

そして翌四日に由布登山の予定であつたが雨天のため見合せて別府に行き五日迄滞在、六日再び温湯村に引き返えして七日滞在、翌十月八日に由布登山をして温湯村に引返へし、翌九日府内へ向け出立したことが「大風流田能村竹田」才一卷所収の「竹田日譜」に記されてある。

二、旭荘先生

日田に居て文玄先生を佐けて専ら塾生を教授して居た旭荘文敏先生は、天保四年九月年廿七歳の特別府に遊び、由布嶽に登つたことが、広瀬貞治氏編著、昭和三年十一月十日発行の「旭荘小品」中に採録されている。男、林外先生の著に係る「文敏公年譜」中に次の如く書いてある。天保三年癸巳年廿七日日田、佐文玄公教授、九月遊別府登由布嶽」と。

(立川)